

## 中学部の授業におけるパソコンテイクの実践と課題

東京都立大塚ろう学校 大野栄子

### 1 パソコンテイク導入の経緯

平成16年度本校中学部では、「ろう学校だからこそできる情報保障や施設設備を整えて教師の授業を側面から支え、幼児・児童・生徒に解る授業を提供する環境をつくる」という考えの下に、要約筆記ボランティアを週に2～4時間導入した。対象教科は暫定的に、言葉や文章のやりとりが最も多いとおもわれる「国語」「社会」と、集団の学習である「総合的な学習の時間」とした。平成17年度に向けて、自律経営予算からノートパソコンの購入費と役務費を捻出することとし、ボランティアと小・中学部教員で16年度の実施上の課題について協議した。本格的に実施する上で、呼称を「パソコンテイク」、「テイカーさんに支援していただく。」という言い方に統一し、組織的に運用することとした。平成17年度は4月に新校舎に移転し、ホームルーム教室1室をパソコンテイクの部屋として固定した。有線で床にカバーを着けた状態で保護し、ノートパソコンはパソコンテイク支援のある時間毎に専用の戸棚から取り出して準備設置する方法をとっている。いずれは無線にして、持ち出して他の教室でも使えるようにすることを計画している。対象教科は、引き続き「国語」「社会」「総合的な学習の時間」とし、週13時間導入している。テイカーさんは約15名で、1時間毎に交替である。2ヶ月毎の協議会で、テイカーさんと教員が実践上の成果や課題を検討し、改善の具体策をその後の実践に生かしている。

### 2 中学部の実態

#### (1) 生徒について

障害等の特性や生育歴・教育歴などの要因が多岐にわたり、聞こえの状態や日常のコミュニケーション方法、生活や学習の実態は多様である。

聴力は、裸耳 75dB～125dB、補聴器装用 25dB～80dB である。コミュニケーション手段は、聴覚口話、手話、指文字、筆談を場面や対応する相手にあわせて使い分けている。

教育歴では、幼稚部では全員がろう学校に関わっている。学齢期のインテグレート及びU・Lターンの状況は以下の通りである。

(単位：人)

中学部実態		幼稚部	幼から中	小学部での転入転出		中学部での入学転入転出		
学年	生徒数	ろう幼	ろう小中	1年インテ	中途入U	入学時U	中途入出UL	中途入ろうから
1年	14	14	6	8	6(各学年)	2	0	0
2年	14	14	7	7	0	6	2(U・1は出)	0
3年	4	3	2*	1	0	1	1(L中途失聴)	2*

#### (2) 授業体制について

・学習グループは、国社数理英は習熟度別で4～5人で編成、選択教科では個々の課題に合わせ、保体は学年、音美技家は習熟度を平均化した編成としている。学期毎に授業や試験の結果と本人保護者の意見をとりいれ見直しをする。本年度後期に、集団確保の目的で1年生の編成替えを行った。総合的な学習の時間・特別活動は学部全体または学年を越えた縦割りグループ、道徳・自立活動は学年または学級で指導をすすめている。

- ・原則として教科担当制である。下学年対応グループは、小全免許をもつ教員が担当することもある。必要に応じて複数担当者で指導する。教科以外の指導は複数担当である。
- ・パソコンテイクの支援は、原則として3年生と学年対応の2年生の2グループ及び1年生の1グループである。総合的な学習の時間は、学部全員が対象となる。

### (3) 教員について

- ・7学級で教諭11、講師1(24時間)、応援1(12時間)。講師に要約筆記経験がある。
- ・経歴はろう学校中学部以外に、養護学校、普通小中高、ろう学校各学部の経験者である。

### (4) 学校の統廃合など中学部の置かれた状況について

東京都のろう学校は、現在、幼稚部から専攻科までの立川校と葛飾校（平成14年度に足立校と綾瀬校が統合）、幼稚部から中学部までの品川・江東・杉並・大塚、高等部単独校の大田・石神井の計8校である。来年度は、品川・江東・杉並・大塚の各中学部が閉課程、大田・石神井が募集停止となる。新たに中高一貫型の中央ろう学校が創立され、18年度から20年度まで大塚校舎に中央ろう学校中学部、18年度のみ石神井校舎に大田・石神井の在校生及び中央ろう学校高等部の新生が入居する。18年度で大田・石神井は閉校となり、中央ろう学校は21年度改築後の杉並校舎に完成した形で再スタートする。

中央ろう学校の入学生を中心とする大塚校の児童・生徒の実態においては中央校の指導は考えられない。想定される次年度の体制を念頭に置いて現在の大塚の中学部の指導実践の検証を行っている。

## 3 パソコンテイク導入授業の実態

### (1) パソコンテイクのねらい

- ①わかる授業を実現する一方法とする。
- ②情報保障の一つとして利用のしかたを知り、将来も活用できるようにする。

導入後1年余りの現在も当初と同じねらいであるが、「中学部の生徒の有効活用」を考えたとき、ろう学校の教育の根幹や全体を視野に入れて検討する必要を感じ始めた。この組織再編の時期にパソコンテイクという時流に沿った方法の活用を検討を通して、聾教育のポケットともいわれる中学部の教育の位置付けや役割を明確にできるかもしれない。将来を見通して、この子どもたちに今何を投げかけ、どの程度受け取らせ、どのような力を身に付けて今後引き継いでいくのか、具体策を一つでも明示して次に引き継ぎたい。

### (2) 教員の意識の変遷

モニターの大きさや位置が定まるまで時間を要した。自分の言葉がどのように要約されるのか気になったり、保護者のテイカーさんから授業への批判がされるのかという戸惑いもあった。次第にこのような目先のことが気にならなくなり、生徒の様子に気を配り、有効活用に気持ちが向くようになった。検討課題がつかめてきて、テイカーさんとの打合せや話し合いも細かくできるようになってきた。しかし、教員の意識の個人差はある。

「国語」（個人の机の前に2人に1台ノートパソコンを置いて提示する。）

- ・慣れてきて生徒の利用の様子がわかってきた。3人の授業では、個人指導ができるため画面に頼る必要がないようだ。教員の手話や伝達技術の高い場合には必要ないと思われる。
- ・教科の部屋として教材の継続掲示や常備ができないので、教室の使い勝手が悪い。
- ・あらゆる方法で提示することは、多様なコミュニケーション手段を使う生徒のいる学習グ

ループに必要なことと思う。ただし、情報が多くて選べずに翻弄されている生徒もいる。

「社会」

- ・コミュニケーションの難しい生徒は、どの教材を見ればよいのかわからないようである。
- ・内容が人名や地名などたくさん名詞が出るし、音声と手話だけでは伝えきれないところの確認をしている。
- ・インターネットやその他の表示機能が一体化し、字幕が出てくると良いと思う。



「総合的な学習の時間」（42インチのモニターを指導者の横に置いて提示している。）

- ・ほとんどの生徒が内容の確認に利用しているようである。
- ・話の流れについていくのが難しい生徒は、指導者と画面を見るタイミングがつかめない。
- ・視線が画面から指導者に移ったことを確認し、次の話にすすめる余裕がでてきた。
- ・画面に表示された言葉を、板書代わりに使うこともできるようになってきた。
- ・複数指導者なので、テイカーさんが生徒の言葉を聞き取れないときに通訳ができる。



(3) 生徒の感じ方 (抜粋)

- ・知らない手話を先生が使ったときや、手話があいまいなときに見る。(1年)
- ・国語では、考えたりいろんな教材を見たりしていると画面を見る暇がない。(1年)
- ・音声だけでも授業はわかっている。(1年)
- ・文字がずれていくのが面白い。(1年)
- ・ずっと画面を見てしまう。(1年)
- ・わかりやすいと思うけど、何がわかりやすいか説明しにくい。(1年)
- ・授業の話し言葉で分からなかった部分の補足として、役に立っている。(2年)
- ・友達の言っていることを聞き逃しがちで、画面に表示されると、「ああ、こんなこと言っていたのか。」とわかっておもしろい。ただ、自分が変な冗談とかいったのを、そのまま画

面で見ると、すごく恥ずかしいことがある。(2年)

- ・友だちとしゃべっていたり、先生が見えなかった時に画面を見るとわかる。(2年)
- ・数学や理科にもほしいと思うときがある。(1・2・3年)
- ・先生と画面の両方を必ず見ている。(3年)
- ・漢字を確認できる。読めても意味が分からないこともあるが先生に質問する。(3年)
- ・将来、会社での会議や説明会でパソコンテイクをつけてくれるといいなと思う。(3年)

(4) テイカーさんから

全国要約筆記問題研究会(特定非営利活動法人・以下「全要研」)は、厚生労働省第2種福祉事業として活動を行っている。テイカーさんは、3年以上のタイピングの実績があり全要研の活動を通して現場で要約筆記の経験を積んでいる。全要研の発行誌には、全国のノートテイクの実践と成果が数多く紹介されている。

ろう学校中学部の授業でのパソコンテイクの本格的な導入は初めてである。通常学級、難聴学級での実践は小学校からある。使用ソフトは、漢字変換経過が画面に出ず、表示速度が従来よりも改善された”まあちゃん”。テイカーさんの入力量は、個人の入力速度に左右される。ろう学校中学部では教員の話しがゆっくりで繰り返して言うことも多いため入力率は高く、7～8割ではないかということである。現在の入力内容はテイカーさんによって異なり、教科内容を中心にまたは生徒の発言もできる限り入力するなど統一されていない。現在、文部科学省の施策がないので認可してほしいと考えているそうである。

- ・生徒のテイク内容の利用率はつかんでいない。入力しながらの確認は不可能である。
- ・通訳中の、聞き取り不明部分\*\*\*は、生徒から「何のこと？」の質問があったが、通訳としては失格と考えている。
- ・不明部分の\*\*\*は、中学生にはかえって気になることなのであろう。
- ・集団の大きさで、利用の成果についての受ける感じが異なる。小集団で利用率が少ないと感じるケースでも、大きな集団の中では、周囲が言っていることで受け取れなかったことを、うまく画面でとらえている場合がある。小集団の中での、情報量の多さは、実態によっては情報の取捨選択の厳しい側面が顕著になってしまうのかもしれない。
- ・要約筆記は、そもそもは聴覚障害者の情報把握量の補いである。手話でなされる雰囲気との伝達の不足分の補いである。要するに口話の正確さの補いである。
- ・生徒は手話が分からないときに役に立つと言っているようだが、その手話がどの言葉に対応しているのか果たしてわかっているだろうか疑問である。
- ・新しいソフトでルビが素早く表示されるようになったが、意味をとらえる課題は残されたままである。
- ・高校生の要約筆記の体験は少ないので比較はできない。大学生への要約筆記経験から、大学生は授業中の集中度や授業終了後の質問の多いことなどから、目的意識をもって有効に活用していることがわかる。中学生の受け取り方は全く異なると感じる。利用しているのかしていないのか、学力向上に効果があるのかつかめない。
- ・内容の重要な部分の伝え方を、中学生レベルではどのようにしたらよいのだろうか。
- ・慣れてくれば、中学生でも利用の仕方の向上が望めるのではないか。
- ・モニターと教員との位置関係を再検討する必要がある。モニターは指導者近くで一つに絞った方がよいかもしれない。

・板書との重複を避けるために板書の見える後ろの位置にいたい、生徒の発言をとるためには、顔が見える前の位置にいないなければならない。

・パソコンテイクのねらいの考え方はいろいろあると思われる。教員とさらに話し合いをして今後のやり方も考えたい。

#### (5)保護者から

・利用しているしていないにかかわらず、とにかく画面表示があると安心できる。

・数学が苦手だが、国語力の問題が大きいので、言葉の意味や基本概念を常に表示してくれるとありがたい。

・教科を絞らずに、全部につけて欲しい。

#### (6)見学者から（主旨）

聴覚障害のある大学生から

・中学生は、見ているのかいないのかわからない。もったいない。

聴覚障害者を指導する大学の先生から

・導入のねらいを明確にし、生徒に利用方法を指導していく必要を感じる。対象、目的、方法等々、課題は多岐にわたっている。

一般の人から

・ろう学校では、授業でこのような工夫をしていることがわかった。すごくわかりやすい。

## 4 考察

(1) パソコンテイクのろう教育における位置付けを想定し、効果的な活用を考える。

ろう学校の個別指導計画に基づく指導は、一般的に次の手順で計画－実施－評価される。情報保障の一方法であるパソコンテイクは、※に位置すると考えられる。

①子どもの成長・発達段階の実態を多様な視点や各種方法で表した結果から把握する。

②社会のニーズ、本人のニーズ、保護者のニーズ、教員の期待を明確にする。

③実態に即してニーズにできるだけ応えられるよう、どんな力を身に付けるか決める。

④その力をどのような方法で身に付けるか検討する。＜※パソコンテイクの活用＞

⑤成果をどう評価するか検討する。

⑥実際の評価をする。

⑦課題は何か検討する。

⑧課題の改善策を考え、次の目標をたてる。

〔⑨申し送り事項を決定する。〕

従って、パソコンテイクを導入し、現在はもちろん今後継続して本人に役立てるためには、実施前の段階で①から③の検討が必要であり、その成果を評価するには④から⑧までを解決しなければならない。

(2) 現在の中学部の各段階の課題

〔A〕学校の取り組みの姿勢の課題

学校で新しい試みを導入するとき、経緯が納得できない、誰々が推進するのは筋でないなど、本質の検討無しに阻まれたり、意義や活用方法の共通認識を図る段取りも踏まず、個々に実施せざるを得なかったりすることがある。結局、組織として取り組むことなく、新しい

方法の根付く機会を逃し、旧態然とした指導法を続ける結果になる。ようやく軌道に乗り始めたパソコンテイクの実施を徒労に終わらせず、東京都ろう学校研究会やこの全日聾研の場を借りて他校と共に考え、他の方法で取り組むなどの試行が広がり、発展に結びつくのなら嬉しいことである。

〔B〕計画－実施－評価の各段階についての現状と課題及び解決策

①子どもの成長・発達段階の実態を多様な視点や各種方法で表した結果から把握する。

定期考査、学力テスト、読書力検査、漢字検定、英語検定、ろう学校の統一テスト、授業の様子、日常の生活のしかたなどで判断している。読書力検査の結果は、教員が判断した学習グループ設定に一致しており、パソコンテイク対象グループもこれに基づいている。

パソコンテイクの支援の対象として、内容への興味・意欲の強さと授業への姿勢の点から、小学校4学年3学期以上の力が必要であると思われる。小学校4学年3学期の力に達していない場合は、中学生であっても知識欲が未分化で、聴覚活用と複数の視覚的刺激がある教室環境では注意散漫になる傾向があり、十分な効果が見込まれない。感想で、「文字がずれていくのが面白い。」「ずっと画面を見てしまう。」生徒がその例である。授業で何を得るかという目的の自覚を促しながら、情報の取捨選択の理念と方法を具体的な場面でわかりやすく指導し、生活の各場面での身近な情報処理のしかたを指導する必要がある。

②社会のニーズ、本人のニーズ、保護者のニーズ、教員の期待を明確にする。

生徒本人は、学校卒業以降の将来像を具体的に描いて現在のニーズを言える段階には至っていない。小学校にインテグレートしたが、自分の力を出し切れずに友人関係や学習面で悩み、その改善・解消を望んで小・中学部でろう学校にUターンしてきたケースが半数以上を占める。保護者は、普通教育で成長することを期待してインテグレートに踏み切ったが、保護者自らまたは本人の強い希望で、ろう学校に居場所を求めてかえってきている。中学部で勉強さえ解るようになれば、現在の発達段階でのニーズが満たされ、充実感が味わえるとはいえない。「音声だけでも授業はわかっている。」と感想を言う生徒は、学習以外のつまずきから回復することを望んで、Uターンしてきている。一方、ろう学校で幼稚部から現在に至るまで過ごしてきた生徒たちは、中学生になり多少視野が広がってきたことに加え、現在まで異なる体験を積んできた友人の言動に出会って、珍しく感じたり圧倒されたりしている。聞こえそのものについての実感も変化してきているようだ。とにかく自分が知らないことを知りたいのだが、どうしたらよいかわからず戸惑っている。

③実態に即してニーズにできるだけ応えられるよう、どんな力を身に付けるか決める。

以上の現状やニーズを受けて教員は、生徒や時に家庭ぐるみの精神面の立て直しや充実を図り、学習ができる環境を整え、積み残しを埋め、学力の向上を図るという大役を担う。中学生の発達段階では、自分探しをしっかりとすることが土台となる。それぞれの育ちのなかで大切にされたり疎外されたりした体験から、自分とは何か、友人とは何か悩み、なぜ勉強するのか、なぜ毎日学校に行くのか疑問をもち、考え、自分なりの結論を出して次のステップに進む。その過程で知識欲が高まり情報の必要性を感じ、学習したことが身に付く。いくら外から働きかけても、目的意識がなければ知識の定着も学力向上も望めない。

中学部卒業までに、自分の聞こえにくさのしくみや社会生活上の不利益、自分に適した支援の方法について、未熟でも自分の言葉で説明ができるようにする。この自己認識を高等部

に先送りするのでは、学力の向上も先送りにならざるを得ない。

#### ④その力をどのような方法で身に付けるか検討する。〈※パソコンテイクの活用〉

自己認識を促すには、小中学部の自立活動の聴力測定・聴覚管理の指導のみならず、生活全般で取り組む必要がある。まずは周囲の人は何を話し、どう行動しているのかを伝える。そして、日常で可能な限りの会話、コミュニケーション、行動の意味を伝え理解させる。時には友達どうしの会話の背景や心理など細かな説明も必要かもしれない。教員は、折に触れて聴覚障害を含めた一人一人の状況を本人にも仲間にも解るように、また仲間の状況を知ることが自分を知ることにつながられるように意識して支援する必要がある。もちろん学習の場面でも自他について認識できるよう授業中のやりとりを伝えるが、ここでパソコンテイクが重要な支援方法になる。「漢字を確認できる。読めても意味が分からないこともあるが先生に質問する。」「数学や理科にもほしいと思うときがある。」と感じている生徒は、授業への姿勢ができてきている。「先生と画面の両方を必ず見ている。」「授業の話し言葉で分からなかった部分の補足として、役に立っている。」情報の大切さを認識して、活用する気持ちが表れている。「友達の言っていることを聞き逃しがちで、画面に表示されると、「ああ、こんなこと言っていたのか。」とわかっておもしろい。ただ、自分が変な冗談とかいったのをそのまま画面で見ると、すごく恥ずかしいことがある。」この生徒は、普通学級で周囲の状況が把握できず、授業に充分参加させてもらえないと受け取り、気持ちが萎縮した状態で入学してきた。周りのことや人の気持ちを知りたい、将来つきたい職業があり、それに向けて文章力を高めたいと明確な目標を掲げて前向きに努力し、1年余で感受性や接し方に厚み加わり、同時に学力が目に見えて向上している。今の悩みは、「私は何をやるのにも自信がないから試験でも失敗する。自信をもつにはどうしたらよいのだろう。」とアピールし、いろいろなところから情報を得て答えを見いだそうとしている。例えば、このようにパソコンテイクを利用して、授業を含め学校生活全体で喜怒哀楽を感じ、学習にも生活にも意欲をもてるようにできたら理想的であろう。

#### ⑤成果をどう評価するか検討する。

”「解る授業」「楽しい授業」を目指した授業改善”は大切であるが、『教員の教科内容伝達のスキルを高める』ことだけでは実現しない。授業中に解ったことを、自分の時間で再度考え、覚え、理解度が表れるテストに前向きに取り組む。そこで、解らない自分に嫌気がさし、楽しいことやりたいことを我慢して学習する苦しみを味わった結果、「そうか。この現象はこういう理由なんだ！」などとという身近なことがわかる喜びや爽快感を味わうところに導く必要がある。それには、点数や〇×を強調するのではなく、自分が何をどこまでわかり、できるようになったのかに目が向くように指導する。パソコンテイクも利用して授業の仲間や先生とのやりとりの中で、「この勉強が自分の生き方にどのように役立っていくのか。」気付かせるよう指導の工夫をする。その経過をよくみて特徴をとらえて評価し、個々に合わせた心構えや適切な学習方法、時間の使い方の指導につなげる。

#### ⑥実際の評価をする。

準ずる教育といっても、教科の評価規準の視点のみでは不十分である。各教科担当から意欲、取り組みの様子やその原因、得意・不得意や今後伸ばせることなどの見立てを出し合い、定期的にケース会議を行い、実態に対する共通認識を図る。その時、客観的なテスト・検定の結果も参照して一人一人の人間像を全教員が描き、自分の担当授業の中でより実態に即し

た指導方法に結びつけられるようにする。

⑦課題は何か検討する。

個々に対応した指導の検討に、発想を変えた指導方法の考え方がでてきた。パソコンテイクを導入した教科で、テイカーさんとのやりとりを工夫し画面を積極的に活用してポイントを伝えたり、従来の教材の提示を改善・発展したりすることにつながりそうである。

⑧課題の改善策を考え、次の目標をたてる。

多くの多方面の課題に対する改善策を細かく検討する必要があるため、一人で背負い込まず、協力体制のもと多くの目で実態の共通認識を図り、指導し、評価することを心掛ける。パソコンテイクの実践は、開かれた授業の実現に有効であった。

⑨申し送り事項を決定する。

申し送りの留意点は、下記である。

- ・生徒の成長発達段階を常に確認する。
- ・準じていようと無かろうと、実態に適した内容・方法・手段で効率よく指導する勇気を持つ。裏付けをもった指導をすることが鉄則である。
- ・一人の教員が背負い込まないで、多くの目で対策を検討する。

以上のことから、パソコンテイクの意義は、解る授業の実現に役立てると共に、教科内容のみならず、学習生活(とでも言うか)全体を支援するものであるといえる。

(2) 聴覚障害者にとっての情報とは何なのか。ろう学校の情報教育では、何を教えたらよいのだろうか。

情報障害と言われる聴覚障害である。通常、成長する各段階で様々な情報が入り、理解や経験により、取捨選択して活用する力が培われるのだろう。現在、障害の有無にかかわらず、情報の取捨選択が難しく、予想もしない出来事があとをたたない。

この社会の状況の中、中学生に対して学校生活や家庭生活で関わる者全員で、まずは日本語と言葉の概念の習得を常に意識して接する必要がある。特に、日常生活での身の回りの物、人、できごと、活動などについて、情報の基礎としてひとつひとつ確認し理解を深めさせることが不可欠である。常識を常識ととらえられない体験の少なさや体験しても力として身に付けられない受け皿の頼りなさが中学部の生徒の課題である。日常のことをわかってはじめて発問の意図がわかり、生活指導の意味も実感としてとらえられるのである。

高等部で学習する情報に向けて、機器やシステムを目的に添って駆使すること、あらゆることが知る対象であること、広く深い知識を素早く正確に安全に発信する大切さを知ること、様々な情報は結局は人が選び配信し受け取って活用するのだから人間関係や人間そのものを尊重する気持ちを育てることを指導する必要がある。聴覚障害者がQOLを高め維持して生きていくには、学校と家庭で意図的に基礎固めをすることが絶対に必要である。

(3) 進路に直面した本校の生徒・保護者・教員

パソコンテイクとは直接関係ないが、滅多に経験できない閉学部や中高一貫型ろう学校の創立を身近に見ることにより、自分の進路や将来について考える機会を得た。現在最も必要なものは、正確な情報である。実物を見ることのできない紙面上の学校像は、誤解を生じかねない。本人・保護者も教員も慎重にならざるをえない。自分の特性を分かっているほど噂

にも翻弄されず、落ち着いて自分の歩む道を考えることができるようである。

## 5 まとめ

ろう学校中学部の情報保障としてのパソコンテイクによる支援は、まず、明確な目的を共通認識した上で、施設設備の充実、工学的な検討、及び人的資源の有効活用のもと実施されるものである。

まずは導入して、人的支援と施設設備の土台ができ、毎時間の活動が軌道に乗ってきた。生徒の姿を重ねて見始め、ようやく期待される成果に対する課題が見えてきた。指導者や保護者の自己満足でなく真に有効な情報保障のあり方を明確にする時期だろう。人権云々で非難を受けようと保護者に疎まれようと生徒実態を明らかにし、今これを補わなければ、ろう教育の改善はないということを、教員が自覚して授業改善にあたることが先決である。

私は、中学部の授業におけるパソコンテイクの利用の目的を聴覚障害のある自己認識を促進する一手段とすること」と考える。その一環として「わかる授業を実現する」ことがある。ただし、わかる授業は生徒の状況により第二の目的となる場合もある。そしてこの目的は、程度の差があるにしても、中学部のみならず聴覚障害者への情報保障の目的として一生涯どのような場でも通用するものと考えている。

聾学校の教育は制度や体制で決められたことをそのまま実践するだけでは成果はあがらない。今、目の前にいる子どもたちの実態の傾向を反映させて授業の意義を探り、その都度見直しを図る必要がある。その中の一つとして、情報保障のあり方も検討する必要がある。あらゆるレベルに合わせた情報保障のあり方の定義付けをして、成果を予想した上での利用が真に有効な情報の提供になる。工学的に聴覚障害の不利益が改善されることに越したことはないが、その視点のみでは不十分だろう。現在の生徒の実態の改善を図りながら、実力を向上させ社会に通用する人間に育てる第一条件として、まずは、家庭や学校などの生活の中で自分を知ることが必須である。一度にわかるものではないために、周囲の者が意識して一つ一つの状況の中で教える必要がある。私自身、ろう学校に異動した当初、障害の自己認識の土台は幼少時から育っており、手話を使っていれば大概のことが理解でき、自然に自己認識が深まるのだろうという甘い認識で指導にあたっていた反省から、様々な働きかけで聞こえないことを認識させようとしてきた。口話、手話、字幕でどのくらいの理解が図れているのか、非常に不安である。情報提供者の思いこみによる満足はこわいと思う。情報をより確実に得たいとろう学校に入学してきて、多少の情報量の増加で小集団の中で力が追いついたと思いきなり、増えた情報でも無意識のうちに翻弄され、取捨選択できないのに分かった気分になる状況も怖い。目的の共通認識をテイカーさん、教員、保護者、本人で確認しながら、提供の改善・バージョンアップをすすめる必要がある。健常者にも言えることだが、氾濫する情報に翻弄されない自己をもつことは、この社会の中で非常に難しいことになりつつある。まして、周囲の出来事をも小耳に挟むことの困難な聴覚障害者の自己の確立、情報の取捨選択はよほど指導者のポイントを絞った指導がなければ実現することではないと実感している。

不明瞭部分をテイクできなかったことへの生徒の批判があったが、聴覚障害者の発語の聞き取りに不明瞭部分があるのは仕方のないことで、教員との打合せで重要な発言を確実に入力できるよう今後の工夫が必要である。一方、入力者の技量を問うだけでなく、生徒の自らの発語の不明瞭さへの気付きにつながるような場の指導も必要であると感じる。自らの実態

を自覚することのできる社会としての役割を果たせる学校の実現に努めたい。

—参考—

中学部2年生の日記から

今、本当に辛いです。友達の関係って本当に難しいなあと思いました。

私が言ったことを失礼かな〜と思って気になりました。相手が何故怒っただろうと感じました。先生、私って悪口を言う女ですか??それがよく分かりません。

皆とお喋りしたいと思っておりますが、なんか、通じあわないです。すぐにケンカを売っちゃうのです。私と皆の気持ちが全然違うのです。または考え方。

(だいたい同じ考え方もいるけどね)

私はまだ自信がないけど、皆に伝えたいことがたくさんあります。早く、私を好きになって、伝えたいです。先生、説明とか、私が苦手でしょう(?)だけど、

本当は言えるみたいです。(自信があればね)不思議ですね。自信がない私って。

自信があれば、期末テストとか中間テストとか良い成績をとったかもしれません。

皆の気持ちがよく分かります。〇〇君は忘れ物が多いタイプとか・・・。

皆は、直したい所がある時は、努力していますね。

中学生活って、悲しい、楽しい、くやしい、寂しい、悩みなどの気持ちを経験が分かってほしいと意味だろうと感じています。←違いますか?

(もちろん勉強も関係がありますけど)

本当に難しいですね。

#### 参考文献

- ・森本明子・井坂行男「聴覚障害学生に対するノートテイクによる情報保障について

—情報の量及び質に関する分析を通して」ろう教育科学 Vol.45 No2 2003

- ・太田晴康・下島かほる「通常中学校における聴覚障害生徒への情報保障」

- ・原田美藤「松山市小中学校における「学校生活支援員」制度」

以上、ろう教育科学 Vol.45No3 2003

- ・下島かほる・太田晴康「通常の学級における聴覚障害生徒への情報保障(2)」

ろう教育科学 Vol.47No2 2005

- ・坂井美恵子「聾学校高等部におけるリアルタイム字幕付き授業の有効性について」

- ・兼子次生「教育字幕の技術的可能性についての基礎的研究

～リアルタイム提示型教育字幕の技術的報告」

以上、全日聾研松山大会(33回)研究集録(教育工学分科会)

- ・「リアルタイム字幕提示を利用した地学の授業」

日本教育工学振興会・授業実践事例CD-ROM＝特殊教育編＝ Ver.1.0

<http://www.japet.or.jp/index.cfm/4.534.98.32.html>